

グローバル教養学部

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

グローバル教養学部では、学位授与方針に基づいて「リベラルアーツ教育」「学際教育と専門性」「少人数教育」「ダイバーシティー教育」「学術英語教育」を柱とした教育課程の編成がなされ、教職員・嘱託職員が協力して学生支援を行う体制ができています。入学定員の急激な拡大に対応してカリキュラムを改革し、開講科目数の拡充とともに科目群の再編成を行っており、幅広く多分野が学べるよう選択必修化の工夫も実施している。科目の体系性と順次性を実現するために、兼任教員とも連携しながら、アクティブ・ラーニングを取り入れたきめ細かな教育がなされており、大変優れている。常に検証を行い、改善の取り組みがなされていることも特徴的である。今後も、少人数教育ならではの、一層の教育成果が期待される。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

当学部は、グローバル化した現代社会にあって、高度な学際的知識と洞察力を兼ね備えた人材の育成を教育目標に掲げている。これは新しい時代のリベラルアーツ教育とも言えるが、その基盤を成すのは、アクティブ・ラーニングをより効果的にする少人数の学習環境と、研究・教育上の国際共通語である英語を教授言語とする授業である。2015年度に入学定員が大幅に拡大され、学部創設時の2倍の規模となった(50人→100人)。その急激な変化の中で学部理念を維持するため、2016年度にカリキュラム改革を実施し、開講科目数の拡充とともに、科目群を4つから5つへと編成し直した。期待通りの成果が得られた面と成果が思わしくなかった面があった。前者についてはさらなる拡充を図り、後者については、その原因の究明と改善に努めている。引き続き「リベラルアーツ教育」「学際教育と専門性」「少人数教育」「ダイバーシティー教育」「学術英語教育」を柱としながら、よりきめ細やかな教育の維持・拡大のため、2018年度春学期より、新カリキュラム(2020年度施行予定)の策定を進めてきた。大枠の議論は既に終了し、現在、詳細設計を行っている。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

グローバル教養学部では、4つの水準を有する学位授与方針(DP)に基づいて、「幅広いリベラルアーツ教育」「学際教育と専門性」「少人数教育」「ダイバーシティー教育」「学術英語教育」を中心とした教育課程(CP)が編成されている。これらの柱に沿いつつ、学部規模拡大に伴ったカリキュラム改革の検討がこれまでも継続的に行われてきており、高く評価できる。さらに、多様な学習状況にある学生たちへの支援を含め、よりきめ細やかな教育の維持・拡大に向けて、改めてカリキュラム改革が検討され、2020年度より施行予定となっている。また、少人数教育におけるアクティブ・ラーニングの活用については先進的な活動を続けており、今後もさらなる成果に期待したい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開講し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

・学生の能力を段階的に伸ばせるよう、1-2年次に学術英語スキル科目(Academic Skill Subjects)と入門科目(Introductory Courses)を置き、学術的な英語力の育成とともに、リベラルアーツに欠かせない重要科目を5つの科目群からそれぞれ4単位以上(100番台、200番台それぞれ2単位以上)履修させている。2-3年次は学際教育を実現するため、多様な分野の科目を設置し、学生の興味に応じてこれらを自由に履修できるようにしている。3-4年次のゼミでは、基礎知識を特定の問題に適用する力を養うだけでなく、海外大学院進学も視野に入れた専門知識と研究能力を習得できるようにしている。個人の研究テーマがゼミの内容と異なる学生に対しては、教員の個別指導により論文を執筆するIndependent Study and Essay I/IIを提供している。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

・GIS Curriculum Map:

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/gis/NEWS/zaigaku/2018/GIS_Curriculum_Map_201903.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> • GIS Curriculum Tree: <p>http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/gis/NEWS/zaigaku/2018/GIS_Curriculum_Tree_201903.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2019 年度 GIS 履修の手引き • GIS Syllabus 2019 • GIS ウェブサイトの Curriculum ページ (http://gis.hosei.ac.jp/cms/?academics=curriculum) 	
<p>②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系的性を確保していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>2016 年度より以下の新カリキュラムを導入している。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 4 科目群 (Arts, Literature and Culture; Linguistics and English Education; Society and Identity; International Relations and Economy) を 5 科目群 (Arts and Literature; Linguistics and Language Acquisition; Culture and Society; International Relations and Governance; Business and Economy) に編成しなおし、学部理念により相応しいカリキュラムを整えた。全ての科目群で科目数を増やすことで、学際教育と少人数教育の両方を維持している。 • 100 番台・200 番台レベルそれぞれにおいて選択必修科目を設け、各科目群から 2 単位以上履修することを学生に課している。学生は幅広いリベラルアーツの基礎を習得した後に、300 番台レベルの科目や 400 番台レベルのゼミで、より専門性の高い科目を履修することになる。 • 入学時の学生の英語能力に応じ、学術英語のスキルに関わる科目を 1-2 年次必修とし、かつ、入学時の TOEFL-ITP スコアが低い学生にはより多くの必修科目を設けることで、学術英語のスキル習得にも体系的性と順次性を確保している。また英語の能力別クラス編成の基礎となる TOEFL-ITP 欠席者への対応、およびスコアと自己認識する英語力に著しい差を感じる学生への対応に公平性を期すため、その手順を定めている。 • 従来通り、全ての科目に 100~400 番台のナンバリングを行っている。200 番台以上の中・上級科目の履修に際して、対応する初級・中級科目の既習を条件とする場合は、シラバスに prerequisites を明記している。 • 200~400 番台の科目において、厳密な prerequisites を要求しない科目でも、既習が望ましい科目がある場合は、その旨シラバスに明記している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> • GIS Curriculum Map: <p>http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/gis/NEWS/zaigaku/2018/GIS_Curriculum_Map_201903.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> • GIS Curriculum Tree: <p>http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/gis/NEWS/zaigaku/2018/GIS_Curriculum_Tree_201903.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2019 年度 GIS 履修の手引き • GIS Syllabus 2019 • GIS ウェブサイトの Curriculum ページ (http://gis.hosei.ac.jp/cms/?academics=curriculum) 	
<p>③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 本学部のカリキュラム全体が幅広く深い教養及び総合的な判断力を培うことを目的としている。これまでも多様な科目を柔軟に履修することを学生に促していたが、1-2 年次から特定の分野に偏った履修をする学生がいたことから、2016 年度入学者から、100 番台・200 番台に選択必修科目を設け、5 科目群からそれぞれのレベルで 2 単位以上の履修を課している。 • 2018 年度は 12 のゼミを開講した（2019 年度は 10 つのゼミを開講）。ゼミでは専門性の高い教育・研究を行い、学術能力を高めるだけでなく、様々な共同作業を通して豊かな人間性の涵養も期待される。 • 学部独自の留学制度である Overseas Academic Study Program (OAS) も、国際社会で活躍するために不可欠な教養と人間性の育成に貢献している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> • GIS Curriculum Map: <p>http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/gis/NEWS/zaigaku/2018/GIS_Curriculum_Map_201903.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> • GIS Curriculum Tree: 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>http://www.hosei.ac.jp/documents/gakubu/gis/NEWS/zaigaku/2018/GIS_Curriculum_Tree_201903.pdf</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 GIS 履修の手引き ・GIS Syllabus 2019 ・OAS パンフレット 	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初年次教育として学術的な英語スキルの修得を目的とした Reading、Writing、Debate and Discussion の三技能の科目を必修化している。Listening 力の向上を主目的とした科目は配置していないが、全てが英語で行われる授業によりその能力は学年進行とともに大きく伸びることが期待されている。また、入学時の TOEFL-ITP スコアに応じて、スコアが低めの学生にはより多くの英語スキル科目（最大 16 単位）を履修させている。これにより、遅くとも 2 年次の秋学期までには論文を読み解き、卒業時に提出されるゼミ論を相応しい文体で発表できるだけの英語力を身につけることが可能となる。学術英語のスキル科目には共通のシラバスと教科書を設定し、担当教員によりレベルや内容に差が生じないように配慮している。 ・100 番台の専門入門科目に関しては、選択必修科目を設けることで、リベラルアーツ教育に特に重要な科目を 5 科目群それぞれから 2 単位ずつ履修させている。また、一部の科目を春学期と秋学期の双方に設置することで、履修の機会を増やしている。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 GIS 履修の手引き ・GIS Syllabus 2019 	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な文化・社会事象を地球全体が直面する課題として、あるいは現代世界が共通して経験している変化として捉えることが本学部の理念である。設置科目のほとんどが、国際性と異文化理解を涵養する科目とも言える。 ・客員教員を含めた専任教員の半数以上が外国籍である他、日本人教員も全員が海外での長期にわたる教育・研究経験を持つ。教員・在学生の出身・長期滞在先は 43 の国・地域に及び、教授言語が英語であることと相まって、教室に国際社会が具現化されている。 ・学部独自の留学制度（OAS）を推進している。専任教員の OAS Director と英語母語話者 1 名を含む 2 名の嘱託職員が留学ガイダンスやサポートを統括している。また、100 番台に OAS Preparation という科目を設定し、4 カ国の留学先大学の特徴やカリキュラム、大学生活全般に関わる情報を提供している。 ・派遣留学制度、認定留学制度、国際ボランティアにも積極的に参加するよう促している。なお、2019 年秋には 18 名の派遣留学が確定している。 ・2016 年度からは国際ボランティア、国際インターンシップ、短期語学研修も単位認定の対象となっている。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度 GIS 履修の手引き ・GIS Syllabus 2019 ・OAS パンフレット ・大学案内 ・2018 年度第 10 回教授会議事録、資料 1 	
⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育に関しては、2016 年度から新たに設けた Business and Economy の科目群の中で、関連科目として International Business and Employability を設置している他、従来通り、総合科目として、Employability Skills I/II、Introduction to Career Design I/II などの乗り入れ科目を維持している。 ・学部内にキャリア支援委員会を設け、キャリアセンターと連携を取りながら学生のサポートを行うほか、キャリアセンターの職員によるゼミ出張ガイダンスも行っている。 ・2015 年度より、学部は Homecoming Day を主催している。これまで、2015 年、2016 年、2018 年に実施し、次回は 2020 年に実施予定である。在学生もこれに参加することで、卒業生とキャリア面でのネットワークを作ることができる。 	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p>・学部企画として、1)就職内定学生（4年生）が自身の就職活動経験を1-3年生に対して共有することを目的として、GIS キャリアフォーラムを2回実施した（11月28日開催、参加者14名、12月7日開催、参加者10名）。2)GISの卒業生及び法政出身者（他学部）を招き、GIS学生に対して、アクセンチュアの会社説明会を実施した（1月10日、参加者10名）。3)就職後における将来のキャリア形成を目的として、欧州の有名ビジネススクール（IESEビジネススクール）の担当者を招き、説明会を開催した（10月19日開催、参加者8名）。4)BMW JapanのCEOを招き基調講演を開催した（12月6日開催、参加者160名）。</p> <p>・ゼミ企画として、福岡賢昌准教授のゼミが、グローバルキャリアフォーラムと題し、グローバル企業等で活躍するビジネスパーソン7名を招聘し、将来、グローバルに活躍するための一助とするイベントを開催した（6月23日開催、参加者100名）。</p>	
<p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>将来、外資系企業勤務等をはじめとしたグローバルキャリアを目指す学生のニーズに応え、1)学部企画として、アクセンチュアによる会社説明会、BMW JAPAN CEOによる基調講演、IESEビジネススクールの担当者による説明会を実施し、2)教員のゼミ企画として、グローバルに活躍するビジネスパーソンを招いたグローバルキャリアフォーラムを実施する等、学生に対するキャリア支援施策の大幅な拡充を図った。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度GIS履修の手引き ・GIS Syllabus 2019 ・「GISキャリアフォーラム」リーフレット ・「アクセンチュア会社説明会」リーフレット ・「IESE Business School（スペイン）担当者によるMBAプログラムの説明会」リーフレット ・「BMW x GIS Collaboration Event」リーフレット ・「グローバルキャリアフォーラム」リーフレット 	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部ガイダンス（2019年4月1日実施） ・教員による新入生オリエンテーション（2019年4月1日実施） ・教員による個別相談（2019年4月5日実施） ・自己学習支援委員による個別面談（成績の低下や獲得単位数の少ない者に対して毎学期実施。2018年度春学期は6月8日、6月14日、6月15日、秋学期は12月7日、12月12日、12月20日に実施した）。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別面談報告書（2018年度第5回教授会議事録、資料7；2018年度第11回教授会議事録、資料4） 	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>少人数双方教育の特徴を生かし、きめ細やかな学習指導を行っている。授業の前後やオフィスアワーで学生の質問や相談に応じるほか、必要に応じてアポイントメントによる面談も行っている。成績不振や単位数の少ない学生には自己学習支援委員が面談し、支援やアドバイスを行っている。留学や教学のサポートは専任教職員だけでなく、英語母語話者1名を含む2名の嘱託職員も対応している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別面談報告書（2018年度第5回教授会議事録、資料7；2018年度第11回教授会議事録、資料4） ・2019年度GIS履修の手引き ・GIS Syllabus 2019 	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>少人数双方教育の特徴を生かし、多くの科目において、英語によるレポート、ディスカッション、プレゼンテーション、グループプロジェクトなどを必須としている。これらに参加するには関連資料を読む、資料を用意する、グループによる準備作業など授業時間外での学習が不可欠であり、多くの科目で教授資料をH' etudes等の授業支援サイトに事前掲示する等、学生が十分に予習を行えるよう配慮している。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・GIS Syllabus 2019	
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 ほぼ全ての授業でディスカッション、プレゼンテーション、グループプロジェクト、校外学習（field study）などのアクティブ・ラーニングを取り入れている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2019年度GIS履修の手引き ・GIS Syllabus 2019	
⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※どのような配慮が行われているかを記入。 GISでは少人数双方向教育を重視しており、一部の例外を除いて30名を大きく超えないようにしている。100番台から300番台における一般科目の平均受講者数は約22名である。学術英語スキルに関する科目とゼミの平均受講者数はさらに少ない。2015年度からの入学者の増加に対応するため、毎年15.5コマ（通年換算）を増やしてきており、2018年度（4年目）までに総62コマの増設が行われた。また、兼任講師のための懇談会では、様々な事項に加え、適正学生数、セレクションについて文書を配布し説明した（2019年3月20日）。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・Teaching in GIS（兼任講師全員に配布・送付している学部作成のパフレット）	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 ・全学部の成績分布表 ・成績調査申請制度 ・OAS委員会、派遣/認定留学単位認定作業委員による本学の評価基準に基づく審査	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2018年度春学期GPCA集計表（2018年度第11回教授会議事録、資料1） ・2018年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」の集計結果（2019年度第1回教授会議事録、資料1） ・採点訂正申請書（2018年度第7回・第8回・第9回・第14回教授会議事録）	
②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組み概要を記入。 シラバスチェックの際に成績評価の基準と内訳についてシラバス第三者委員会で確認している。学生から成績調査の申請があった場合は、担当教員に根拠資料の提出を求めている。さらに、成績評価表提出後に教員から訂正依頼があった場合は、その事由の報告も求めている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・GIS Syllabus 2019	
③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。 ・キャリアセンターが管理している卒業生の進路に関するデータを基に、卒業生の就職・進学状況を把握している。 ・Homecomingで卒業生にアンケートを行い、転職や大学院進学などの情報を集め、できる限り最新データの把握に努めている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・卒業生データ提供申請書	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>執行部とカリキュラム委員会で検証した上で、教授会で全教員に周知している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進級・卒業判定名簿（2018年度第13回教授会議事録、資料21） 	
<p>②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分野や各科目の特性に応じて学習成果を評価できるよう、履修可能人数、授業の進め方、評価方法と基準を学生にシラバスと初回授業で明瞭に示している。評価には学期末試験だけでなく、随時行われる小テストやレポート、口頭発表、授業への貢献度なども考慮するよう、兼任講師を含む全教員に指導している。 ・TOEFLスコアの向上を主目的とする科目 English Test Preparation/English Test Preparation Advanced と留学準備科目 Overseas Academic Preparation については、科目の性質上「Pass（合格）/Fail（不合格）」で評価し、結果はGPAに算入されない。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度GIS履修の手引き ・GIS Syllabus 2019 ・2019年度Seminar履修について (http://www.hosei.ac.jp/gis/ja/NEWS/zaigaku/180921_01.html) ・Information for Instructors（兼任講師全員に配布・送付している学部作成のパンフレット） 	
<p>③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <p>Curriculum & FD委員会では、定期的に全学生の履修登録状況、履修単位数、GPAの確認を行っている。また、TOEFL-ITPの複数回受験を義務化し、スコアを用いて英語力の向上を測定し学習成果の把握・評価に努めている。大学評価室が行っている様々なアンケートも活用している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の履修登録状況、履修単位数、GPAの確認（カリキュラム・FD委員会） ・卒業生データ提供申請書 ・TOEFL-ITP Level 1（1年目は4月と1月の2回、2年目は4月か1月の1回、および留学帰国直後）のスコアデータ 	
<p>④学習成果を可視化していますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学年のGPA、履修単位数、進級・留級の状態等の一覧表を作成し、教授会で共有している。 ・英語力に関しては、学部実施のTOEFL-ITPをはじめ、学生各自が任意で受験するTOEFL-iBTやIELTS、TOEICの結果も報告させ、データ化している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進級・卒業判定名簿（2018年度第13回教授会議事録、資料21） 	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学生の履修登録状況、履修単位数、GPA、TOEFL-ITPスコアをCurriculum & FD委員会と教授会で確認し、それを基にクラス編成や採用教員の担当科目決定、自己学習支援委員による個別面談を行っている。 ・大学評価室による各種アンケート調査、卒業後の進路調査の結果を教授会で共有している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進級・卒業判定名簿（2018年度第13回教授会議事録、資料21） ・TOEFL-ITP Level 1（1年目は4月と1月の2回、2年目は4月か1月の1回、および留学帰国直後） 	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※利用方法を記入。

学部長が教員全員に対する学生アンケートに目を通し、問題のある教員には面談し、事情説明や改善を求めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・授業改善アンケート

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
アクティブ・ラーニングを活用した EMI (English as a Medium of Instruction) の実践には、学生、教員、双方に高い英語力が必要である。しかし、専門知識と相応しい英語力を併せ持つ教員が全国規模で枯渇しているという現状がある。専任、兼任問わず、専門分野における十分な研究業績と高い授業運営能力を有し、学部理念に相応しい人材を国際公募で獲得できるよう鋭意努力していきたい。	

【この基準の大学評価】

①教育課程・教育内容に関すること (1.1)

学生の能力育成のための教育課程・教育内容については、4点それぞれの学位授与方針に基づいた設定がなされており、少人数教育に基づいた学際教育ならではの効率的かつ魅力的な課程・内容・方法となっている。カリキュラムの順次性・体系性については、カリキュラムツリーおよびカリキュラムマップにおいて的確に表現されており、また学部パンフレットにおいては視覚的にも分かり易くなるように工夫が凝らされている。幅広く深い教養および総合的な判断力をもった豊かな人間性を涵養するために、学生の履修状況も考慮しながら、適切に教育課程が編成されている。とりわけ、初年次教育と高大接続への配慮については、非常にきめ細かい学生への支援がなされており（低い試験スコアの学生への配慮、共通シラバスの採用）、高く評価できる。国際性を涵養するための教育内容は、国際性と異文化理解を促す教育課程のみならず、OASの推進や留学サポート、各種国際交流制度の活用、多文化的な教員組織によって十二分に実現されている。キャリア教育については、学部内の「キャリア支援委員会」がキャリアセンターとも実質的な連携を取りながら、学部企画として学外講演者の招聘、卒業生と在校生が参加する Homecoming Day、さらにゼミ企画のイベント開催など、多様な取り組みを通じて、卒業後の進路（就職・進学）について学生たちが意識し、熟慮する時間が多く設けられている点も、高く評価できる。一部のイベントにはそれほど学生が集まらない状況が生じているが、この点は貴重な機会を有効活用するためにも、広報などを含めた対策が必要であると考えられる。

②教育方法に関すること (1.2)

グローバル教養学部の履修指導および学習指導については、いずれも適切な措置を講じている。特に履修指導については、少なくとも4つの機会を学生に提供しており、英語を教授言語とする学部として、適切かつ非常に優れた指導・支援体制を設置している。学習時間の確保のための方策については、H'etudesを含めた学習支援システムも活用しながら、準備時間を要する課題を多くの科目を設置することで確保できている。効果的な授業形態の導入としては、ほぼすべての授業においてアクティブ・ラーニング形式を導入している。授業形態ごとの受講人数については、総コマ数が急増する中で一般科目平均受講者数は22名となっており、十分に配慮・対応がなされている（兼任講師のための懇談会における説明会もあり）。全体として、学生数の増加に伴った総コマ数の増加に対応するため、継続的に取り組みが行われていることは、高く評価できる。

③学習成果・教育改善に関すること (1.3~1.5)

グローバル教養学部における成績評価と単位認定の適切性は、全学部の成績分布表の確認や成績調査申請制度、さらに「OAS委員会」や「派遣／認定留学単位認定作業委員」による審査によって確保されている。厳格な成績評価のための方策としては、「シラバス第三者委員会」や「成績調査申請制度」の活用・フィードバックがある。学生の就職・進学状況の把

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

握については、キャリアセンター提供データの確認のみならず、Homecoming Dayにおいてアンケートを実施することで、最新のデータを確保したうえで学部内の全教員に共有されていることは、高く評価できる。成績分布や進級などの状況の把握については、執行部およびカリキュラム委員会において検証・把握され、教授会を通じて全教員にも周知されていることも、評価できる。分野の特性に応じた学習成果を測定する指標の設定・取り組みについては、学期末試験だけでなく他の評価対象を設定することを、兼任講師にも周知・指導している。具体的な学習成果を把握・評価するための方法については、語学試験の複数回受験の義務化と学習成果の把握・評価に留まらず、より大きな視点から、カリキュラム委員会・FD委員会が定期的に履修登録状況、履修単位数、GPAを確認している点は、学習成果の可視化の取り組みとともに、評価できる。学習成果の定期的検証に基づいた教育課程・内容・方法の改善へ向けた取り組みについては、カリキュラム委員会・FD委員会と教授会、そして自己学習支援委員によって検証・把握された上で、大学評価室の各種アンケートや卒業生の進路調査などについても情報共有がなされており、評価できる。「学生による授業改善アンケート」の組織的利用についても適切に行われている。

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【FD活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> Curriculum & FD委員会（教授会執行部を含む） <p>【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 執行部及び各分野の専任教員が授業相互参観を行い（2018年度は春学期7月18日<8科目>実施、秋学期11月28日<9科目>実施）、担当教員にフィードバックしている。また、FDワークショップにて参観の報告を行っている。 3月に兼任教員懇談会を開催し、専任教員および兼任教員を交えて教育方法に関する案内と意見交換を行っている（2018年度は3月20日）。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> FD Workshop 配布資料 授業相互参観の報告書（2018年7月18日および2018年11月28日開催のFD Workshop） 兼任教員懇談会（2018年度第12回教授会議事録、資料6） 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>学会・シンポジウムが学内で開催される場合、教授会での情報共有やポスター掲示などによって教職員やゼミ生の積極的な参加・支援を促している。また、他大で開催する場合も教員が主催者の場合はPRの場を提供している。社会貢献については今年度、GISの知見を社会に還元する企画として千代田区との共同企画を検討中である。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>現在、GISの専任教員は12名（任期付き助教2名含む）であり、その内、日本人は6名である。全教員が学部内、学部外問わず複数の委員会に所属しており、校務に多くの時間が費やされている。日本人教員を含む全教員は全学的な文書執筆は日本語、学部内運営や学外交渉では英語と、高度なバイリンガル能力が求められる。これらの仕事をより効率的かつ効果的に進めることができるよう現在、その方策を摸索中である。各教員が十分な研究時間を確保できるよう鋭意努力していきたい。</p>	

【この基準の大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

グローバル教養学部内のFD活動については、執行部のみならず、カリキュラム委員会・FD委員会やシラバス第三者委員会といった複数の委員会によって運営されている。さらに、相互授業参観、兼任講師のための懇談会、さらにFDワークショップを通じて、専任・兼任講師のFD活動が実施され、またFD関連の情報が周知されるようになっており、高く評価できる。

研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化、また資質向上を図るための方策としては、特にキャリア教育に属する社会貢献活動に関連する部分においては、千代田区との共同企画も計画中であり、極めて活発に促進・実施がなされている。各教員の専門研究に関わる活動の活性化などについては、非常に充実した教育課程・内容の運営・改善活動が実現されている。一方で、各教員に十分な研究時間が確保できないという状況を防ぐため、研究者としての教員が教育活動や学内業務を行うという前提の元で、引き続き研究体制の充実に向けた努力が期待される。

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	学部入学定員の大幅増により生じた現行カリキュラム上の問題点を解消し、学部の理念である国際基準の教育に相応しい新カリキュラムを策定・施行する。	
	年度目標	2020年度導入の新カリキュラムの編成に向けて、現行の卒業要件、科目群と学際性、EMI（教授言語としての英語）とCLIL（内容・言語統合型学習）をめぐる課題を洗い出す。	
	達成指標	学部の特徴であるリベラルアーツ教育、多分野性と学際性、EMI、少人数制による双方向授業の4点の質的向上を反映した新カリキュラムの素案を提示する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2020年度導入の新カリキュラムの策定を目指して、毎月2-4回のペースでCurriculum & FD委員会を開催し、達成指標にあげた4点の課題を中心に検討を続けている。現行の5つの科目群をHumanities、Social Sciences、Management Sciences（仮称）の3領域に大括り化する一方、各領域内において科目の整理と細分化を図る方向で素案がまとまりつつある。その過程では、「学生による授業アンケート（各学期末）」や「学生モニター（11月）」で聞かれた学生の興味・期待にも十分な関心を払った。
		改善策	課題の洗い出しと新カリキュラムの素案提示という目標には、ほぼ到達したとも言える。しかし、具体的な科目構成と担当教員に関しては、さらなる議論が必要である。新任採用人事の進捗状況も見極めながら、2019年夏までには新カリキュラムの詳細を確定したいと考えている。
質保証委員会による点検・評価			
所見	2018年度はCurriculum & FD委員会を20回以上開催し、2020年度導入予定の新カリキュラムの議論を行い、現行の5科目群を新たに3領域に再編成する方向性が示された。またリベラルアーツ教育の質的向上、学際性と他分野性の一層の効果的配置を目指して、3領域のdisciplineとsubdiscipline及び科目に関して検討を加え、新カリキュラムの基礎的な構築を進め、2020年導入実現に目途がついた。少人数教育と双方向授業に関して、アンケート等から得られた学生の意見を、カリキュラムの議論に反映するように努めた。		
改善のための提言	新カリキュラムにおける科目と担当教員を確定したうえで、2020年のスタート時には再編されたカリキュラムの理念を分かりやすく説明できるようにする必要がある。新カリキュラムに基づいて新任教員を採用する必要があるが、その際、専門分野の業績と教育経験に加え、学際性に対する意識、双方向教育の能力、英語力について、学部の要求・基準を明確にして募集すべきである。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	①「グローバル社会の諸問題の解決に資する人材の育成」という当学部の理念達成に向けて、より専門性の高い学際的知識を滋養する教育方法を導入する。 ②履修希望者の特定科目への集中と入学時における英語力の差の拡大に対して、有効な対策を検討する。	
	年度目標	①-1 プレゼンテーション、クラス・ディスカッション、教員との対話型授業など、少人数	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		<p>制による双方向教育のさらなる拡充を図る。</p> <p>①-2 ゼミ研究の質的向上を図る。</p> <p>②-1 特定科目への履修者集中の原因を突き止め、2019 年度以降の複数コマ開講の可能性を探る。</p> <p>②-2 入学時の英語力が低い学生に対して、ERP 科目の受講を促す。</p>
	達成指標	<p>①-1 双方向型授業の実施状況を把握する。</p> <p>①-1 双方向型教育が部分的にも行われる授業については、2019 年度シラバス作成時にその旨明記するよう要請する。</p> <p>①-2 ゼミ論文、レポート等の提出にあたっては、ゼミ生等による相互批評の機会を設ける。</p> <p>②-1 複数年にわたり履修者が集中する科目を検出し、授業テーマや時間割配置との関連性を調べる。</p> <p>②-2 ERP 科目の履修者数をレベル別に集計し、1 月の TOEFL-ITP のスコアで補修授業の成果を確認する。</p>
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	<p>①-1 履修者が 40 名を超える講義科目を除き、ほぼすべての科目で双方向型教育が取り入れられている。2019 年度シラバスには Active Learning の有無を明記する欄が加わった。</p> <p>①-2 ゼミ論の提出前後に、教員とゼミ生による批評が行われている。</p> <p>②-1 春・秋それぞれの学期において、履修希望者が集中する科目は調査済みである。</p> <p>②-2 ERP 科目履修者の TOEFL-ITP スコアの向上は確認されている。</p>
	改善策	<p>①-1、①-2 年度目標達成</p> <p>②-1 特定科目への履修者集中に時間割が大きく影響していることが確認されたが、他にも単位取得の難易度や既習知識の必要性など、科目内容による様々な要因が複合的に作用していることが窺える。到達指標に記した通り、継続調査が必要である。</p> <p>②-2 ERP 科目の履修に加え、短期語学研修プログラムへの参加や G ラウンジの利用等との相関性も検証したい。</p>
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	<p>①-1、①-2 は、年度目標が達成され、学部の理念に基づいた方法で教育が行われていることが確認できた。</p> <p>②-1 春・秋両学期に、履修希望者が集中する科目を調査し、問題点を確認することができた。</p> <p>②-2 ERP 科目履修者の TOEFL-ITP スコアの向上が確認された。</p>
	改善のための提言	<p>①-1、①-2 に関して、新任専任教員・兼任教員に、新学期開講前に説明の機会を設けて、方針を周知する必要がある。</p> <p>②-1 履修者集中の理由は多様であり、単一の見方では説明できないことが多い。引き続き調査を継続し、科目個別の対応策を講じていく必要がある。</p> <p>②-2 各種語学科目履修、プログラム参加と TOEFL-ITP スコアの向上の相関関係を、学生に情報として知らせることで、学習指導に生かしていくことが求められる。</p>
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	<p>①大幅な入学定員増の下で、4 年間の学習成果を適切に測る評価指標を検討する。</p> <p>②学部の理念を反映した教育成果の可視化を強化する。</p>
	年度目標	<p>①学習成果を GPA や外部英語試験により測定することの妥当性を確認する。</p> <p>②学部パンフレットや学部ウェブサイトで教育成果を公表する。</p>
	達成指標	<p>①GPA、単位取得状況および外部英語能力テスト (TOEFL 等) のスコアを入試経路別・学年別に集計し、退学・留年率や早期卒業率、留学経験との相関性を検証する。</p> <p>②学部パンフレットや学部ウェブサイトにおいて、就職と大学院進学に関するページを充実する。</p>
	年度末	教授会執行部による点検・評価

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

報告	自己評価	A
	理由	①データは膨大であるが、可能な限り集計・分析した結果、GPA と退学・留年率や早期卒業率の間には明らかな相関が認められた。一方、入学時に行われる英語能力テスト (TOEFL-ITP) の平均スコアは入試経路により大きく異なるが、入学後の英語運用力の伸びは、入試経路より個人の GPA に比例する。GPA が学習成果の測定に最も有用な指標のひとつであることが確認された。 ②学部パンフレットや学部ウェブサイトを開訂する度に、就職と大学院進学に関する情報を随時増やしてきた。
	改善策	①年度目標をほぼ達成。 ②外資系企業への就職と海外大学院への進学が GIS の特徴である。他大学・学部との違いを明示するため、次年度の改訂では就職・進学先のグローバル化をさらに強調した紙面作りを行う。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	①GPA と、退学・留年率や早期卒業率、および入学後の英語運用能力の伸びの間に相関が認められ、GPA が学習成果測定に最も有用な指標のひとつであることが確認されたことは、今後の学習上の指導に有益である。 ②学部パンフレットや学部ウェブサイトを開訂し、就職と大学院進学の情報を増やすことにより、学部の教育の成果を発信することができた。
改善のための提言	①この相関関係は、学習成果を測るうえで重要であるとともに、学部の学生の能力がより明確になり、入試制度改革にとっても有益である。 ②グローバル化に伴う中等教育及び受験生の意識の変化を意識し、それに沿った情報発信を持続的に行うことが必要である。	
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	①中等教育のグローバル化を踏まえて、多様な教育歴を考慮した入試方法を常に検討する。 ②学部に相応しい英語能力試験とそのスコアを検証する。
	年度目標	①2019 年度入試への導入に向けて、急増する海外高校や国内インターナショナル・スクール出身者に相応しい入試方法を探る。 ②CEFR で B2-C1 レベルとされている多くの英語能力試験の中で、学部が求める英語力を真に保証する試験とスコアを策定する。
	達成指標	①IB Diploma 等の国際的な大学入学資格や SAT/ACT スコアの必要性を 2019 年度入試要項に記載する。 ②TOEFL と IELTS を基準とした英語能力試験の換算表を作成する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	①2020 年度入試より、IB Diploma 等の国際的な大学入学資格を 12 月入試 S 規準と秋学期入試国外選考の出願要件に指定した。また、これらの資格を満たさない出願者には SAT を義務づける決定をした。 ②多様な入試に合わせて、TOEFL と IELTS の換算式を適正化した。一部の入試では英検 CSE も援用する。
	改善策	①、②年度目標
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	①2020 年度入試より、入試の種類により IB Diploma や SAT を提出を義務づけたことにより、中等教育のグローバル化の進展に対応することができる。 ②適正化によって、入学志望者の英語力をより正確に評価することができるようになった。
	改善のための提言	①各国の大学入試資格の変化や海外からの受験生の増減等を継続的に検討する必要がある。 ②より能力の高い学生を受け入れるため、各種英語能力試験の比較検討を継続し、換算表を修整する。
No	評価基準	教員・教員組織

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

5	中期目標	①学部教員の年齢構成や教育分野の多様性、英語による教育・実務能力に最大限配慮しつつ、専任採用人事を続ける。 ②世界基準の教育を提供するとの学部理念から、研究業績と英語力を重視した兼任講師の採用を行う。	
	年度目標	①2018年度末に退職する助教1名と任期なし専任教員1名の補充を図る。 ②研究業績を精査の上、複数名の面接による英語力チェックを経て兼任講師を決定する。	
	達成指標	①学部の理念に相応しい教員を、春学期中に JREC-IN 等を通して国際公募する。 ②十分な業績と英語力を持つ兼任講師を秋学期終了時までまでに確保する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	①SGU による助教特別枠1名と任期なし専任教員枠1名（助教2名へ代替）の補充人事を以下の手順で行った。(1)人事委員会の設置(5月)、(2)JREC-INへの公募情報の掲示(7月)、(3)候補者の面接(10月)、(4)教授会での承認(11月)。候補者の研究・教育・言語能力はもとより、当学部の教育理念への適応性、教授会成員の年齢構成にも配慮の上、厳正な審査を行い2名の採用を決定した。 ②英語を母語としない兼任講師候補者については、専門分野の研究業績に加え、十分な英語運用力の有無も慎重に考査し、6名を新規採用した。
		改善策	①研究分野・業績の点で補充に至らなかった1名の助教枠に関して、2019年度春学期中に再度、国際公募を行う。なお、今年度末に急遽退職が決まった専任准教授1名の枠についても、2020年度導入の新カリキュラムに向けて、同時期に補充を進める。 ②年度目標をほぼ達成
質保証委員会による点検・評価			
所見	①適切な手続きに従い、助教2名を採用した。 ②適切な手続きに従い、兼任講師6名を採用した。これらの人事により、2019年度の教育の質を維持することができる。		
改善のための提言	助教1名と今年度末に退職する専任教員1名の枠を補充し、2020年度以降の新カリキュラムに向けて、教員体制を充実させる必要がある。		
No	評価基準	学生支援	
6	中期目標	成績不良者や英語力の低い学生に対して、学部全体で支援と指導を行う。	
	年度目標	教員による入学オリエンテーション時の個別履修相談と修得単位数が低い学生への個別面談を継続する。	
	達成指標	「個別履修相談」と「個別面談」の人数と相談・面談内容を集計して、それらを生かした2019年度の授業編成を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	入学オリエンテーション時の個別履修相談では、22名の希望学生に対して3名の教職員が親身に対応した。また修得単位数が低い7名の学生には、自己学習支援担当の教員が個別面談を行った。それらの結果は教授会で随時報告し、専任教員全員が情報を共有した。面談で判明した成績不良の原因は、健康や経済状況によるものが大半であり、明白に授業編成に起因する例は確認できなかった。
		改善策	年度目標達成
質保証委員会による点検・評価			
所見	年度目標を達成した。教員が、入学オリエンテーション時の個別履修相談、修得単位数が低い学生に対する個別面談を行った。結果は教授会で報告され、専任教員全員が情報を共有し、学生の学習指導と生活指導に役立てることができた。		
改善のための提言	成績不良者や英語力の低い学生に対して、学部全体で支援と指導を行い、必要であれば学生相談室との連携を考える。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

7	中期目標	学部の理念と特色を生かした社会貢献・社会連携を推進する。	
	年度目標	学際的なグローバル研究と英語イマージョン教育を基調とした連携・貢献の可能性を、関係諸機関との折衝を通して確認する。	
	達成指標	社会貢献・連携の具体的な方法と対象機関の例をリスト化する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	①福岡ゼミ×CePiC<英語・日本語>(6/23): CePiC(伊勢志摩サミットの環境大臣会合のサイドイベントとして立ち上がった組織で国際SDGs持続可能な開発目標達成の舞台・広場としての機能を持つ一般社団法人)との共催でグローバルキャリアフォーラムを実施。GISの学生を中心に約100名が参加。7名の登壇者とグローバルキャリアについて議論し、将来のキャリア形成の一助とした。 ②BMW×GIS Collaboration Event<英語>(12/6): BMW Group Japan CEOを招き、BMWの戦略、自動車業界の現状、課題、将来及び自身のキャリアをテーマとした基調講演を実施。GIS・ESOPの学生を中心に約160名が参加。学生は基調講演やその後の質疑応答を通して、外資系企業の戦略や市場で求められるナレッジ・マインド・スキル等について幅広く学んだ。
		改善策	①、②年度目標達成 年度目標であった関係諸機関との折衝を通じた連携・貢献の可能性の確認にとどまらず、1社団法人、1企業と連携し、左記のイベントを開催した。来年度も学部としての社会連携・貢献のあり方を希求するとともに、同種のイベント開催の検討及び実施に向けて尽力していく。
		質保証委員会による点検・評価	
所見		GISの理念に沿って二度のイベントを開催し社会貢献・社会連携を推進することができた。	
改善のための提言		キャリアおよびビジネス関連のイベント開催に加え、教育等他分野の社会貢献・社会連携の可能性を検討する。	

【重点目標】

最も重要かつ即応性が必要な年度目標は、学生の受け入れに関するものである。国内の中等学校では英語教育と様々な形態での国際理解が著しく進展している。他方、高校時代に単独で海外留学し、「帰国生入試」に準じた経路で、国内主要大学への入学を目指す受験生も増加の一途を辿っている。しかも背後には、入試要項の抜け道を指導する留学者の存在も窺われる。その状況下で、多様な教育歴に配慮しつつ公正な方法で、学部理念に相応しい入学者をいかに確保するかは大きな課題である。

①出願資格：国内の教育制度によらない出願者の学習達成度を測るためには、共通の評価基準が必要である。出願資格としてIB Diploma、GCE A-Level (UK)、NCEA (NZ) 等、国際的に信頼性の高い大学入学資格の取得を求める。それらの資格を有しない海外からの出願者(受験前年度の国内高への編入生を含む)には、SAT/ACTの受験を義務付けることを検討する。

②英語能力試験：CEFRのB2-C1レベルに相当するとして、国内に多数の英語能力試験が林立しているが、TOEFLとIELTS以外の信頼度は、国際的にも経験的にも高いとは言えない。各試験機関が謳う能力レベルをそのまま受け入れるのではなく、試験間の正確な換算表を作成する。

【年度目標達成状況総括】

本年度の最重要課題は入試制度と出願資格の公正化であった。高校の3年間のみ単身留学する「出国生」と「国内インターナショナル・スクール出身者」という、従来の「帰国生(主に海外で初等教育を受けた生徒)」の範疇には入らない受験生が急増していた。過去の入学者の追跡調査と中等教育のグローバル化の実態を踏まえ慎重な検討を重ねた結果、上記の①出願資格と②英語能力試験に関わる改革案を、2020年度入試からほぼそのまま適用することを決定した。もうひとつの大きな課題であった2020年度カリキュラムの策定について、素案段階の議論は十分に尽くしたと判断している。多彩な科目を3領域に大括り化し、各領域の主要科目の洗い出しも終了した。学際的科目の位置づけと対応する新規採用人事が次年度に残された課題である。他の評価項目に関しても、概ねその目標を達成している。

【2018年度目標の達成状況に関する大学評価】

グローバル教養学部は「幅広いリベラルアーツ教育」「学際教育と専門性」「少人数教育」「ダイバーシティー教育」「学術英語教育」を中心とした教育課程をよりよい形で実現するために、持続的にカリキュラムや教育課程の改革を行ってき

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

た点は、特筆に値する。とりわけ、中等教育機関におけるグローバル教育および英語教育の進展に合わせて、学生受け入れ条件（入試制度と出願資格の公正化）を慎重に検討・審議し、2020年度の実現に至ったことは、高く評価できる。また、2020年度から施行される新カリキュラムについても長期に渡る検討・審議の結果として実現に至った点も、高く評価できる。それと同時に、初年度からの着実な実施・運用と成果が望まれる。

IV 2019年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	学部入学定員の大幅増により生じた現行カリキュラム上の問題点を解消し、学部の理念である国際基準の教育に相応しい新カリキュラムを策定・施行する。
	年度目標	現行カリキュラムにおける「卒業要件」、「科目群と学際性」、「EMI（教授言語としての英語）」、「CLIL（内容・言語統合型学習）」に関する課題を解決しうる新カリキュラムの編成に着手する。
	達成指標	現行のカリキュラムの課題解決と、学部の特徴である「リベラルアーツ教育」、「多分野性と学際性」、「EMI」、「少人数制による双方向授業」の質的向上を図ることを可能とする新カリキュラムの詳細設計、具体的な科目、担当教員について決定する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	①「グローバル社会の諸問題の解決に資する人材の育成」という当学部の理念達成に向けて、より専門性の高い学際的知識を滋養する教育方法を導入する。 ②履修希望者の特定科目への集中と入学時における英語力の差の拡大に対して、有効な対策を検討する。
	年度目標	①-1 既存科目の講義内容の見直し、適切なレベルへの再配置を検討するとともに、プレゼンテーション、クラス・ディスカッション、教員との対話型授業など、少人数制による双方向教育のさらなる拡充を図る。 ①-2 ゼミ研究における質的向上を目指す。 ②-1 特定科目への履修者集中の原因を突き止め、新カリキュラムに活かす。 ②-2 TOEFL (ITP) のスコアや各講義から英語力が低い学生を把握し個別面談を実施する等、学部として英語力の底上げを図る。
	達成指標	①-1 カリキュラム委員会等で入念に検討し、その結果を新カリキュラム（2020年度）に反映させる。 ①-2 各ゼミにおける質的向上のための工夫・取り組みを把握し、教授会にて共有する。 ②-1 複数年にわたり履修者が集中する科目を検出し、授業テーマや時間割配置との関連性を調べるとともに、新カリキュラムの詳細設計に反映させる。 ②-2 TOEFL (ITP) スコアをリスト化し、各講義において英語力が低い学生を教授会で共有するとともに当該学生には ERP 科目の受講、短期語学プログラムへの参加を促す。また、学術英語スキル科目で英語力が比較的低いクラスを担当する教員と情報共有し、その結果を新カリキュラムに反映させる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	①大幅な入学定員増の下で、4年間の学習成果を適切に測る評価指標を検討する。 ②学部の理念を反映した教育成果の可視化を強化する。
	年度目標	①4年間の学習成果を適切に測る評価指標を検討する。 ②大学案内、学部パンフレット、学部ウェブサイト（英語・日本語）、SNS で教育成果の公表を目指す。
	達成指標	①評価指標のリスト化を行い、各指標の適切性を評価する。 ②大学案内、学部パンフレット、学部ウェブサイト（英語・日本語）、SNS において、進路先（就職・大学院進学）のグローバル化に関するページの充実化を図る。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	①中等教育のグローバル化を踏まえて、多様な教育歴を考慮した入試方法を常に検討する。 ②学部に対応しい英語能力試験とそのスコアを検証する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	①2020年度入試での導入に向けて、高い英語力（4技能）と確かな知識・知的能力の両方を兼ね備えた学生をより多く受け入れることができる入試方法を検討する。 ②入学者が保有する各種英語試験と入学後に実施される TOFL（ITP）スコアを比較分析し、学部が真に保証する英語能力試験とスコアを再検討する。
	達成指標	①検討結果に基づき、自己推薦特別入試（12月入試、秋学期入試）の質的向上、一般入試（T入試、英語外部入試）の改変を行う。 ②入学者が保有する各種英語試験と入学後に実施される TOFL（ITP）スコアの比較表を作成し分析する。その分析結果をもとに上記入試制度の改変を行う。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	①学部教員の年齢構成や教育分野の多様性、英語による教育・実務能力に最大限配慮しつつ、専任採用人事を続ける。 ②世界基準の教育を提供するとの学部理念から、研究業績と英語力を重視した兼任講師の採用を行う。
	年度目標	①2018年度、研究分野・業績の点で補充に至らなかった1名の助教枠に関する新規採用と2018年度末に退職した専任教員1名の補充を図る。 ②研究業績を精査の上、複数名の面接による英語力チェックを経た兼任講師の採用を図る。
	達成指標	①学部の理念に相応しい教員を、春学期中に JREC-IN 等を通して国際公募する。 ②十分な業績と英語力を持つ兼任講師を秋学期終了時まで確保する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	成績不良者や英語力の低い学生に対して、学部全体で支援と指導を行う。
	年度目標	教員による入学オリエンテーション時の個別履修相談、修得単位数及び累積 GPA が低い学生への個別面談を継続する。
	達成指標	「個別履修相談」と「個別面談」の人数と相談・面談内容を集計・分析し、支援、指導方法を策定する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	学部の理念と特色を生かした社会貢献・社会連携を推進する。
	年度目標	学際的なグローバル研究と英語イマージョン教育を基調とした連携・貢献の可能性を関係諸機関と折衝し推進する。
	達成指標	関係諸機関と連携し、社会に資する活動を企画・立案し実行する。
<p>【重点目標】</p> <p>最も重要かつ即応性が必要な年度目標は、学際的科目の位置づけと対応する新規採用人事（研究分野・業績の点で補充に至らなかった1名の助教枠に関する新規採用と2018年度末で退職した教員の補充〈助教2名〉、合計助教3名）である。専門分野の研究業績だけでなく、学部教員の年齢構成、教育分野の多様性、英語による教育・実務能力に最大限配慮し、学部理念に相応しい教員を適切なプロセス（人事委員会の設置等）を経て国際公募し、採用する。</p>		

【2019年度中期・年度目標に関する大学評価】

2020年度からの新しい学生受け入れおよび新カリキュラムの施行に向けて、各領域における現実的なプロセスに基づいて、目標が立てられている。特に、兼任講師の採用人事に加えて、新規採用人事（新規と補充）として3名が国際公募を通じて実施されることになっているが、上記の改革も視野に入れながら、適切な採用人事となることが望まれる。

さらに、一部の科目への履修者の集中への対策については、授業の内容・方法のみならず、単一学部でなく複数の学部の時間割編成も視野に入れた検証となり、非常に困難な作業になる可能性もあるが、一過性の対策ではない形で、新カリキュラムへの適用が望まれる。

【法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況】

特になし

【大学評価総評】

グローバル教養学部の取り組みは、英語によるイマージョン教育を基礎としつつ、リベラルアーツ教育・学際教育と専

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基礎的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

門教育を両立させることで、「高い意識をもってグローバル社会に貢献し、そこで成功するための能力・知識・倫理観を備えた学生」を育成することを目指している。このような教育目標に向けて、本学部は着実な教育改革とその実施運営を行ってきたといえ、特筆に値する。とりわけ、学部規模の拡大と受け入れ学生の質の変化（中等教育の変容）といった現象に対しても、「真の国際人」「世界基準の英語力を身につける」ために徹底した少人数教育を行うなど、慎重ながらきめ細やかに対応策を検討してきたことは評価できる。

ただし、そのような充実した教育制度改革に向けた活動が増える一方で、教員の研究活動の確保が課題の一つとなっている。研究者としての教員ができるだけ最先端の研究環境に身を置くことは、上記の教育目標を実現するためにも不可欠の要素であると考えられる。長期的な一つの課題としては、そのような研究・教育・公務の三要素に、適切なバランスで取り組めるような体制作りが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。